

楊雄の術數學と『太玄』

嘉瀬 達男

はじめに

楊雄（前五三―後一八年）は、成帝朝の宮廷作家として「甘泉賦」などの大賦を制作した後、宮廷における辭賦の制作を放棄し、『太玄』『法言』といった思想書を著した^①。また、『訓纂』『揚雄蒼頡訓纂』『方言』を編纂した小學家でもあった^②。『太玄』は、『漢書』揚雄傳贊に「以爲へらく經は『易』より大なるは莫し、故に『太玄』を作る。……其の本を斟酌し、相ひ與に放依して馳騁す（以爲經莫大於『易』、故作『太玄』。……斟酌其本、相與放依而馳騁云）」とあり、班固は『易』を模倣して作つた書物とするが、楊雄の自序に基づく『同』揚雄傳に、楊雄自身は次のように述べている。

大いに潭く渾天を思ひ、參摹して之を四分し、八十一に極む。旁らに則ち三摹九据し、之を七百二十九贊に極むるも、亦た自然の道なり。故に『易』を觀る者は、其の卦を見て之を名づけ、『玄』を觀る者は、其の畫を數へて之を定む。『玄』の首の四重は、卦に非ず、數なり。其の用は天元より一晝一夜、陰陽數度、律曆の紀を推し、九九大運、天とともに終始す。故に『玄』は三方・九州・二十七部・八十一家・二百四十三表・七百二十九贊あり、分かちて三卷と爲し、一二三と曰ひ、泰初歴と相ひ應じ、亦た顛頊の曆有り。之を擽ふるに三策を以てし、之を關るに休咎

を以てし、之を緝ふるに象類を以てし、之を播すに人事を以てし、之を文るに五行を以てし、之を擬ふるに道德仁義禮知を以てす。主無く名無く、要は五經に合ひ、苟しくも其の事に非ざれば、文は虚しく生ぜず。^③（傍線は筆者に據る）

この文にあつて楊雄は『太玄』について、「渾天」に思いを致し、「陰陽」「律曆」を推しはかり、「泰初歴」「顛頊の曆」と對應し、「五行」を用いてかざつたと言うから、『太玄』が據つたのは『易』だけではなく、天文・陰陽・律曆・五行の知識が用いられているのである。天文・五行・律曆（曆譜）は『漢書』藝文志の分類では、いずれも數術略におかれた分野である。陰陽は諸子略に一家を立てられているが、數術略・五行家にも「泰一陰陽」「黃帝陰陽」「太元陰陽」「陰陽五行時令」といった書名が見え、諸子略と數術略に關係のあることが指摘されている。また『周易』は、六藝略・易家のほかに數術略・著龜家に「周易」「周易明堂」「周易隨曲射匿」が收められている。このように『太玄』は、『周易』を模倣しただけではなく、易學も含めた數術・術數の知識をふんだんに取り入れ、集大成した著作である。ところが『太玄』は易學史の中で論じられることが多いため、『易』と『太玄』はしばしば比較されるが、『太玄』に見られる數術・術數學のありさまや、楊雄と術數學の關係については必ずしも十分には解明されていないように思われる。そこで楊雄は術數學を

どのように理解していたのか、『太玄』にこれらの術數學はどのように導入されたのか、更には『易』を模倣して作ったという評價が妥当なのか否か検討してみたい。

なお、既に多くの議論がなされているとおり、術數學という範疇は小ささか曖昧である^⑦。いまは楊雄の術數學ないし術數學分野への理解を明らかにすることを優先し、天文・曆学・聲律・陰陽・五行・易学の分野を中心に検討を行なうこととし、小論においてはこれらを總稱して術數學と呼ぶこととする。そして各分野の内容については、『漢書』藝文志・數術略や『隋書』經籍志・子部の著録を参照し、各分野の相互関係や周縁領域との關連にも十分に目を配ることとする。

一、楊雄と天文

天文といっても範圍は廣いが、漢志・數術略・天文は、星占などの占書を中心に著録する^⑧。そこでまず楊雄の星占に對する考えを調べてみると、『法言』五百篇に次のように見える。

或ひと問ふ「聖人は天を占ふか」と。曰く「天地を占ふ」と。「此くのごとくんば、則ち史や何をか異なれる」と。曰く「史は天を以て人を占ひ、聖人は人を以て天を占ふ」と。或ひと問ふ「星に甘・石有り、何如」と。曰く「徳に在り星に在らず。徳隆^{さか}んなれば則ち星に晷^{かげ}し、星隆^{さか}んなれば則ち徳に晷^{さか}す」と。

ここで、聖人は「天地を占」い、「人を以て天を占ふ」ものであり、「史は天を以て人を占」うものと、聖人と史が峻別されている。そして（聖人は）人事によって天意を探り、（史は）天文によって人事を明らかにす

るといふ通り、天人相關説に基づいている。「甘・石」は、漢志・數術略序に「楚に甘公有り、魏に石申夫有り」と記される、天文・星占に長じた術數家のことである。『法言』は「星」よりも「徳」の方が重要であるとして、星占よりも徳を高めるべきことを主張する。そして他に楊雄の星占に關する記述は見当たらないから、楊雄は當時盛行した星占に對して批判的な立場にあつたと考えられる。

次に星宿に對する楊雄の考えを探ってみる。楊雄はその辭賦作品の中にしばしば星名を取り上げている。たとえば「招搖（北斗の端の星）」「泰陰（木星の前にある二星）」「槐槍（彗星）」「熒惑（火星）」「天弧（星名）」といった星名が「甘泉賦」と「校獵賦」に見え、いずれも天子の大いなる行動を描寫するための語彙として用いられている^⑩。このほか初期の作「蜀都賦」には「上稽乾度、則井絡儲精、下按地紀、則宮奠位（傍線は筆者）」とあり、その意は「上方天を仰ぎ測れば、蜀を示す星座（井宿・絡宿）は精氣をたくわえており、下方地を眺め治めれば、宮殿は西南にところを得ています」ということであるから、分野説に基づいていることが認められる。そして蜀を井宿・絡宿に當てる分野説は、『華陽國志』卷三引く『河圖括地象』の「岷山の精、上りて井絡と爲り、帝は以て昌^{さか}なるを會^あめ、神は以て福を建つ（岷山之精、上爲井絡、帝以會昌、神以建福）」という緯書の説と一致している^⑪。

『太玄』について言えば、星宿に關する記述は贊辭に見えるほか、二十八宿が七百三十一贊辭に配當されている。この配當は數篇に「求星、從牽牛始、除筭盡則是其日也。（星宿は（中首に）牽牛星（一度）より配當を始め、（一日に一度を運り、）星度を除き盡くせばその日のあるところが何度か分かる）」と記されている。そこで宋・王薦「太玄擬卦日星節候圖」（陳本禮『太玄闡秘』所收）はこの文に従い、牽牛より順に二十八宿の一度を、中首以下の各一贊に配當している^⑫。

〔瑩篇〕天園地方、極植中央（天園地方、極は中央に植つた）。

以上のほかに天文分野で楊雄がしばしば問題としたのは、隋志・子部・天文に收められる「周髀」「靈憲」「渾天儀」のような、宇宙の構造を論じる分野である。これらの文献が代表するように、前漢末の宇宙構造論と言えば蓋天説（周髀説）と渾天説の対立があり、楊雄はまさにその渦中であつた。『桓譚新論』には、蓋天説を奉じていた楊雄が、桓譚より批判を受け、渾天説を支持するに至つたことが記されている。その批判の一つは、春分・秋分の時、晝夜の時間の長さが同じであるにも関わらず、蓋天説では太陽の圓軌道が北斗の北側と南側の長さが一致しないこと（春秋分時、日出入乃在斗南。如蓋轉、則北道近、南道遠）、もう一つは蓋天説の通りに太陽が西に進むのなら、日光は東に動くだけで光が消えることはないが、渾天だから日光が消え去る（天即蓋轉而日西行、其光影當照此廓下而稍東耳、無乃是反應渾天家法焉）、というものである。反論できなかつた楊雄は蓋天説から渾天説へと變節したのだが、晩年の著書『法言』で渾天説について、「落下閔之を營み、鮮于妄人之を度り、耿中丞之を象る。幾きかな、幾きかな、之に能く違ふ莫し」とまで述べている。落下閔・鮮于妄人・耿中丞らが渾天説・渾天儀を作つたことを言う、最古の記述である。星占を主とした『漢書』藝文志・天文家から、宇宙構造論が論じられるようになった『隋書』經籍志・天文家へと、中國古代天文學が變遷していく中で楊雄は、桓譚より批判を受けてはいるものの、當時としては先進的な天文學の知識を有していたと見るべきだろう。このほかに『隋書』天文志に楊雄作として收められる「難蓋天八事」も、蓋天説を舌鋒鋭く批判してよく知られている。¹⁶

そこで『太玄』は渾天説に據るのか、あるいは楊雄變節前の蓋天説であつたのかを調べてみると、以下の記述が見つかる。

〔圖篇〕天道成規、地道成矩。規動周營、矩靜安物（天道は規を成し、地道は矩を成す。規は動きて周り營み、矩は靜にして物を安んず）。

〔攤篇〕日之南也、右行而左還、斗之南也、左行而右還（日の南するや、右行して左還し、斗の南するや、左行して右還す）。

「天園（圓）地方」は、『呂氏春秋』（季春・園道）ほか諸書に見られる、中國古代において廣く認められた天地觀であり、天は圓規を成して動き、地は矩形を成して靜、さらに日は右行して左還（旋）すると言うものである。右に挙げた『太玄』の記述をまとめると、『晉書』天文志上に周髀家すなわち蓋天説として引かれる、「天の員（圓）なること張蓋のごとく、地の方なること棋局のごとし。天の旁轉すること推磨のごとくして左行し、日月は右行し、天に隨ひて左轉す（天員如張蓋、地方如棋局。天旁轉如推磨而左行、日月右行、隨天左轉）」という文と完全に符合する。つまり、『太玄』は蓋天説に據つていたのである。¹⁷ただし『太玄』において、蓋天説か渾天説かという天論の違いが影響する部分はそれほど無いように思われる。

天文の各分野について楊雄は以上のように考えていたが、天そのものについては『法言』寡見に「天を説く者『易』より辯なるは莫し（説天者莫辯乎『易』）」と述べている。この文は『太玄』が『易』を象つた理由の一端を示すものと理解できる。

二、楊雄と曆學

天文の成果に基づき作成されるのが曆であり、『太玄』においては聲律も、曆に結びつけられている。そして曆は『太玄』の構造を支える重要な要素であるから、次に楊雄と曆學の關係について考えてみる。

『太玄』は、九贊の總計七百二十九贊に躡贊と贏贊を加え用いることで、一年の晝夜に對應させ、曆との融合をはかった。ところが七百二十九贊と躡贊・贏贊の七百三十一贊を三百六十五・二五日の晝夜に當てると、〇・二五日分の端數が生じ、晝夜の時間に過不足が出る。そこで七百二十九贊と躡贊の計七三〇贊を三六五日の晝夜に當てると、七百二十九贊に躡贊と贏贊を加えた計七三十一贊を三六五・五日に當てると年を繰り返し、一五三九年が經てば、〇・二五日分の端數の時刻まで正確に一致する¹⁸⁾。しかしこの方法では、原點を回復するまでに一五三九年という長大な期間を要すること、そしてこの長期間にわたり歳首に當てる中初一の晝夜が一定しないことになる。このように『太玄』の贊と曆日には、約〇・二五日分の端數に對する配當においていささか問題がある。

更に『太玄』に用いられる曆は何か、という問題にも注意したい。『太玄』は楊雄當時行われていた太初曆(三統曆)に基づくと考えるのが定説となっているが、楊雄は本傳に「泰初歴と相ひ應じ、亦た顛項の曆有り(前出)」と述べていた。そして「亦た顛項の曆有り」と擧げられた顛項曆と『太玄』の關係について、これまで明快な解釋はなされておらず、楊雄が『太玄』に用いる曆をどのように考えていたのか、その意圖をはかりかねるのである¹⁹⁾。

曆は天體觀測の結果に基づいて作成されるが、楊雄が觀測を行なっていたか否かは明らかではない。また、楊雄が曆自體を取り上げて論じた記述なども見当たらない。劉歆は三統曆を作ったが、楊雄は曆法に改良を加えることはなく、太初曆をそのまま『太玄』に用いて、『太玄』の贊と曆を對應させようとしたようだが、その對應關係には違和感が残る上、顛項曆との關係も不明であった。以上のように、楊雄の曆學への理解についてはいささか疑問が残る。

三、楊雄と聲律

楊雄は音樂に詳しい桓譚より「音を曉らず」と評されたが、五聲十二律については『太玄』數篇にて述べている。この一段は番號を附した通り、大きく四章に分けることができる。

- ① 其在聲也、宮爲君、徵爲事、商爲相、角爲民、羽爲物。
- ② 其以爲律呂、黃鍾生林鍾、林鍾生太蕪、太蕪生南呂、南呂生姑洗、姑洗生應鍾、應鍾生蕤賓、蕤賓生大呂、大呂生夷則、夷則生夾鍾、夾鍾生無射、無射生仲呂。
- ③ 子午之數九、丑未八、寅申七、卯酉六、辰戌五、巳亥四。故律四十二、呂三十六。并律呂之數、或還或否、凡七十有八、黃鍾之數立焉。其以爲度也、皆生黃鍾。甲己之數九、乙庚八、丙辛七、丁壬六、戊癸五。
- ④ 聲生於日、律生於辰。聲以情質、律以和聲、聲律相協而八音生。

まず①では宮・徵・商・角・羽の五聲を君・事・相・民・物に當てる。この配當は『禮記』樂記や『漢書』律曆志上と同じである。次に②では黃鍾・林鍾・太蕪・南呂・姑洗・應鍾・蕤賓・大呂・夷則・夾鍾・無射・仲呂という、十二律呂の生成を説く。この説は『呂氏春秋』季夏・音律に見え、『漢書』律曆志上にも採られている。そして『漢書』律曆志上のこの部分は、劉歆「鍾律書」を採録したと考えられ、①の五聲の配當についても同様である。ただし漢志は、十二律呂の生成を三分損益法によって説くが、『太玄』にはそれが見られない。次に③では十二支を四く九の數に二つずつ配當し、陽數九七五の和を二倍した四十二と、陰數八六四の和を二倍した三十六を合すると七十八となり、これに地數の三を加えれば黃鍾の數八十一が得られ、この八十一から黃鍾の長さ九寸が生じ、

黄鍾を基準として、甲己・乙庚・丙辛・丁壬・戊癸の数が五・九に配されることを言う。最後に④では、五聲を十日干に、十二律を十二支に當て、聲律が諧和することにより八音（金・石・絲・竹・匏・土・革・木の樂器による音）の生まれることを説く。五聲を十日干に當て、十二律を十二支に當てるのは、『呂氏春秋』十二紀・『禮記』月令と同じである。

このように『太玄』數篇は、五聲十二律について『呂氏春秋』『禮記』と一致しており、『漢書』律曆志所引劉歆「鐘律書」とも大きな違いは無い。結局『太玄』は既存の説を取り込んでいたのだが、果たしてこのような五聲十二律の導入が、『太玄』の體系の中でどれほど重要な意味をもつのかという點は、いささか分かりにくい。たとえば五聲十二律と『太玄』の根本原理である天地人三統との關係は、上記④に見た通り十干十二支を媒介とすることで、三統を基礎とする曆に接合することができる。そこで「太玄曆」や鈴木由次郎『太玄易の研究』は、『太玄』に基づき五聲十二律の曆日への配當を示すが、兩者の配當した曆日はほとんど一致していない。この點は十干十二支二十四節氣についても同様である²¹。兩者ともに配當の根據について説明を缺くので不一致の原因は判然としないが、原因の一つは、そもそも『太玄』自體が五聲十二律の曆への配當方法を明確に説明していない點にある。その結果、『太玄』によって占筮を行なう際に五聲十二律をどのように用いるべきかが不明瞭になっている。また、劉歆「鐘律書」と比べるならば、『太玄』は度量衡に關する説明を缺いており、この點でも物足りなさが残る。

四、楊雄と陰陽說

楊雄の陰陽觀は、『太玄』の首辭に最も顯著に見られる。衝篇に「中は則ち陽始まり、應は則ち陰生ず（中則陽始、應則陰生）」と言う通り、八十一

首辭のうち、中首以下應首に至る前半四十一首は全て陽、迎首以降残りの四十首は全て陰に屬し、全首辭が陰陽の消息を説く。たとえば中首なら「陽氣黄宮に潛み萌す。信の中に在らざる無し（陽氣潛萌於黄宮。信無不在乎中）」のごとく、首名を陰陽消息説によって説明する。更に數篇では八十一首を九首ずつの九天に分けるが、圖篇では九天を更に三天ずつの三類に分け、三類における陰陽消息の推移を説く。これは九天という語が示すように、天地人の三統と八十一首における陰陽消息の推移を結びつけたものである。より具體的には圖篇に説明されており、始めの三天は中首以下二十七首が相當し、天に感應して萬物の始動することを行い、次の三天は更首以下二十七首、陰氣は西北に陽氣は東南に集まると言い、終わりの三天は減首以下二十七首であり、精・氣が收斂し、群生・衆物が納まり、天地人が正しきを得ると言う²²。

このように衝篇では八十一首を陽と陰に前後二分するのに對して、數篇・圖篇は八十一首を三分し、陰陽と天地人三統の變化を説く。つまり八十一首について、陰陽の二分類と三つの三天によって重層的に説くのである。他方、八十一首が配當される曆の上で陰陽の消息・循環を考へるなら、『太玄』のように陰陽二分法や天地人三分法を用いるのは牽強であつて、須らく四季に四分すべきであるという批判もある²³。

以上の通り『太玄』は、八十一首全體の配列に陰陽消息を對應させるのみならず、天地人も對應させているが、このほかに七百三十一贊を交互に晝夜に當て、晝は陽、夜は陰とし、「晝は以て之を好しとし、夜は以て之を醜しとす。一晝一夜は、陰陽の分索なり。夜の道は陰を極め、晝の道は陽を極む（晝以好之、夜以醜之。一晝一夜、陰陽分索。晝道極陽）」（攤篇）と、吉凶とも對應させている。このように多數の原理を盛り込み重層的な構造をもつのが『太玄』の魅力であるのだが、その反面、複雑な構造は思想的に矛盾が生じやすく、占斷の際に混亂する懸念があ

る。こうした點は、後世の『太玄』受容状況に如實に現れている。まず『太玄』は、占筮に用いられたという記録がきわめて少ない。この事實は、占筮書としての性質が、『周易』ほどには認められなかったことを證している。反面では『太玄』には多數の注釋書が作られた。これらの注釋書は、占筮書としてではなく、複雑な數理構造や難解な表現をもつ『太玄』の究明を目的としていっていると考えられる。

五、楊雄と五行說・災異說

楊雄は五行說を宮廷に獻じた賦作品に取り入れている。たとえば「河東賦」には「鉤芒」「蓐收」「玄冥」「祝融」という、五行に關わる東西南の神名が見える。この四神に中央神の「后土」を加えた五神が、後述する通り數篇に列擧されている(表1)。更に王莽の新建國の五年後(後一三年)、楊雄は六十六歳にして「元后誅」を書き上げるが、そこにも「冀はくは金火を以て、赤の仍ほ史を有たんことを(冀以金火、赤仍有史)。「群祥衆瑞ありて、正に我が黃來たれり。火徳の將に滅びんとし、惟れ斯を后にす(群祥衆瑞、正我黃來。火徳將滅、惟后于斯)」と劉氏漢朝の火徳が衰え、新の黃徳が起こつたと述べている。このように楊雄は生涯にわたる五行思想を受け入れていた。

『太玄』において五行說は、全体の構造を支える重要な意味をもっている。まず數篇に「三八爲木…四九爲金…二七爲火…一六爲水…五五爲土」と述べ、九贊の位に五行を配當することを言う。九贊の初一を水、次二を火、次三を木、次四を金、次五を土、次六を水、次七を火、次八を木、上九を金に當てることを言うのだが、五材の配列は『書』洪範の「一日水、二日火、三日木、四日金、五日土」に基づく。この一から五までの生數に六から九までの成數を配し、「三八・四九・二七・一六・五五」と

(表1) 「數篇」五行・五材・方位・十干・十二支等の配當一覽表

	三八	四九	二七	一六	五五
	木	金	火	水	土
	東方	西方	南方	北方	中央
	春	秋	夏	冬	四維
日	甲乙	庚辛	丙丁	壬癸	戊己
辰	寅卯	申酉	巳午	子亥	辰戌丑未
聲	角	商	徵	羽	宮
色	青	白	赤	黑	黃
味	酸	辛	苦	鹹	甘
臭	羶	腥	焦	朽	芳
形	誦信	革	上	下	殖
生	火	水	土	木	金
勝	土	木	金	火	水
時	生	殺	養	藏	該
藏	脾	肝	肺	腎	心
侑	志	魄	魂	精	神
性	仁	誼	禮	智	信
情	喜	怒	樂	悲	懼
事	貌	言	視	聽	思
用	恭	從	明	聰	睿
搗	肅	父	哲	謀	聖
徵	旱	雨	熱	寒	風
帝	太昊	少昊	炎帝	顓頊	黃帝
神	勾芒	蓐收	祝融	玄冥	后土
星	從其位	從其位	從其位	從其位	從其位

匹偶をなしたものである。このほか數篇に「五行事を用ふる者は王、王の生ずる所は相、故の王は廢、王に勝つは囚、王の勝つ所は死(五行用事者王、王所生相、故王廢、勝王囚、王所勝死)(傍點は筆者に據る)」と、五行を「王・相・廢・囚・死」と結びつけて説く。これは『淮南子』墜形訓に「壯・老・生・囚・死」、また『五行大義』論四時休王に「王・相・休・囚・死」として見える、いわゆる王相說・休王說である。

以上の通り、五行說については首辭・贊辭よりも衝篇以下の九篇で集中して述べられているのだが、數篇にあつては五行について五材・方位・十干・十二支など百二十の象のほか(表1)、百六十八に及ぶ類も擧げられている(表2)。それをまとめたのが次の一覽表である。ここでは特に、五行の相生と相勝をともしに取り入れていることが注目される。

數篇のこの部分は、『周易』説卦傳が八卦それぞれについて百三十七の象を擧げるのに倣つたものであるが、數篇は説卦傳が八卦を掲げたように『太玄』の首名を掲げることはず、八卦の代わりに五行を掲げてそれぞれについて象・類を擧げている點は注意すべきであろう。まず(表1)のように『太玄』は、「三八木」「四九金」「二七火」「一六水」「五五土」に分け、それぞれ方位・季節・日干・月建・聲・色・味・臭・形・生・勝・時・藏(臟)・侖(存)・性・情・事・用・擣・徵・帝・神・星の配當を列擧する。木金火水土の相勝の順であるが、「三八木」で言えば「生火」と

(表2) 「數篇」 168類一覽表

三八	四九	二七	一六	五五
鱗	毛	羽	介	其裸
雷	鬻	竈	鬼	封
鼓	巫祝	絲	祠	餅
恢聲	猛	網	廟	宮
新	舊	索	井	宅
躁	鳴	珠	穴	中霽
戸	門	文	竇	内事
牖	山	駁	鏡	織
嗣	限	印	玉	衣
承	邊	綬	履	裘
葉	城	書	遠行	繭
緒	骨	輕	勞	絮
赦	石	高	血	牀
解	環珮	臺	膏	薦
多子	首飾	酒	貪	馴
出	重寶	吐	含	懷
予	大哆	射	螫	腹器
竹	釦器	戈	火獵	脂
草	春	甲	閉	漆
果	椎	叢	盜	膠
實	力	司馬	司空	囊

三八	四九	二七	一六	五五
魚	縣	禮	法	包
疏器	燧	繩	准	輿
規	兵	火工	水工	穀
田	械	刀	盾	稼
木工	齒	赤怪	黑怪	畜
矛	角	盲	聾	食
青怪	螫	舒	急	穴
魘	毒			棺
狂	狗			犢
	入			衢
	取			會
	罕			都
	寇			度
	賊			量
	理			土工
	矩			弓矢
	金工			黃怪
	鉞			愚
	白怪			牟
	瘖			
	譜			

あるように、相生説も取り入れている。方位以下の配當については、ほぼ『呂氏春秋』十二紀・『淮南子』時則訓に沿っているものの、形・事・用・擣・徵は『尙書』洪範の五行・五事・庶徵に據っている。²²⁾
 注意すべきは(表2)の部分である。原文では「三八爲木……類爲鱗、爲雷、爲鼓……」のように、「類」として擧げられるのだが、「三八木」の類は三十、「四九金」は四十二、「二七火」と「一六水」は二十八、「五五土」は四十と、類の數が一定しない。これら百六十八の類は、「三八木」の鱗や戸のように他書の時令に見える配當もいくらかはあるが、その多くは配當の根據を明確にすることが困難である。また、五行に配當された類の數が最小で二十八、最多が四十二あることからわかるように、「鱗・毛・羽・介・裸」のように五行すべてに對應する配當は一部に限られており、類の配當は體系を備えていない。この類に擧げられたものは、木・金・火・水・土を見渡した配當というよりは、木・金・火・水・土それぞれからの類推に基づいて考えられたものと思われる。²³⁾
 以上に見た通り、楊雄は陰陽説と五行説を『太玄』の中心に据えているのだが、『法言』では五行説の創始者鄒衍に對して批判的である。『法言』五百に「鄒衍は迂(でたらめ)にして信ならず(鄒衍迂而不信)」²⁴⁾と言い、『同』問道では「(鄒) 衍の天地の間を知る無きに至りては、隣すと雖も覲(み)ざるなり(至……衍無知天地之間、雖隣不覲也)」²⁵⁾と言う。他方、『同』淵騫には「守儒には袁固、申公。災異には、董相、夏侯勝、京房。(守儒、袁固・申公。災異、董相・夏侯勝・京房)」とも述べており、儒者の轅固生・申公とともに、災異を説く者として董仲舒・夏侯勝・京房を高く評價している。董仲舒・京房にはそれぞれ『春秋繁露』『京氏易傳』があり、夏侯勝は「洪範五行傳」を父の夏侯始昌より受けており、いずれもが楊雄の五行説に強い影響を與えたものと考えられる。そこで災異と楊雄の關係についても一瞥しておく。

楊雄の災異説については、『漢書』五行志（中下）に記事がある。建平二年（前五）、朱博と趙玄がそれぞれ丞相と御史大夫に着任した際、鐘の鳴るような大きな音がしたため、哀帝が黃門侍郎であった楊雄と李尋に下問した。二人はそれぞれ「鼓妖（つづみの怪異）」であると答え、原因は丞相と御史にあると意見したものである。李尋は、夏侯勝の従父子夏侯建の『尚書』を張山拊に學び、「洪範災異を好み、又天文月令陰陽を學んだ」人物である。本傳に據れば、李尋は災異説を用いて成帝期の丞相翟方進にしばしば進言し、後には哀帝の信任も得、改元を奏上したものの効果無く、遠流に處されている。それも建平二年のことである。楊雄も夏侯勝の災異説を認めていたから、李尋同様「鼓妖」と判断したのである。更に五行志はこの記事の末に「京房易傳」の語を添えている。現在傳わる楊雄が災異を説いた記事はこの一件のみであるが、董仲舒や京房の災異説も含め、楊雄への影響は少なくなかったと言えよう。

六、楊雄と易學

最後に術數學分野にあって、楊雄が最も得意としたと思われる易學について検討する。まずは『周易』と『太玄』を比較對照するが、優れた先行研究が既に多數あるので、ここでは要點のみ指摘する。

『周易』は陰陽の二爻を三重して八卦、八卦を組み合わせて六十四卦と六十四卦辭を成すのに對して、『太玄』は天・地・人の三畫があり、この三畫を四重して八十一首と八十一首辭を作る。『太玄』八十一首の配列は、中首より始まっており、孟喜・京房の卦氣説と一致する。ところが『周易』は六十四卦すべてに各八爻辭及び象辭をもつのに對し、『太玄』八十一首には各九贊及び各九測辭がある。この九贊は八十一首に對應し、また計七百二十九贊の各二贊を一日の晝夜に配し、踰贊と羸贊を用いて

一年の曆日に當てることは、既に小論「二、楊雄と曆學」で述べた。ほかに『太玄』は『周易』の十翼にも倣っており、『易』繫辭傳には『太玄』の「攤・瑩・掇・圖・告」が相當し、文言傳には「文」、說卦傳には「數」、序卦傳には「衝」、雜卦傳には「錯」、象傳には「首」、象には「測」が相當する。

このように『太玄』が『周易』に象り、構造のほとんどの部分が『周易』に基づくこと、まさに「漢書贊」に「以爲へらく經は『易』より大なるは莫し（前出）」と言う通りである。しかしながら『太玄』には『周易』と異なる點も多い。既述の通り『太玄』は天文・曆・聲律・五行の學を取り入れていたが、これらは本來『周易』にない要素である。また、『太玄』は『周易』の陰陽二爻を天地人の三畫に改めている。この改變は『周易』と『太玄』の最も根本となる原理を全面的に改めたものであるから、『太玄』は『周易』の根本原理を否定したのであり、模倣の域を逸脱していると言えそうだが、この點については後述する。

一方、楊雄の易説には孟喜・京房らの卦氣説や象數易説の影響が認められることは、多くの先行研究によって指摘されている。しかし楊雄に對する嚴遵の影響も無視することはできない。嚴遵は蜀の街で賣卜をしていた市井巷間の卜筮者であるから、嚴遵の易説は漢志で言えば六藝略の易家ではなく、數術略・著龜家に分類されるものと考えられる。數術略・著龜家には、『史記』龜策列傳に見られる神龜などを用いた卜筮家や、『同』日者列傳に見える司馬季主やその褚少孫補に描かれる市井巷間の賣卜者が用いたであろう『周易』『著書』のほか、京房・費直・焦贛の『易林』の類と考えられる『周易』三十八卷や、京房の弟子の任良の著と考えられる『任良易旗』七十一卷が収められている。楊雄は若い時、こうした卜筮家や賣卜者に類した嚴遵なる著龜家に従って學んでいたのであり、上京後にはしばしば朝廷において嚴遵の徳を讃えているから、嚴

遵の楊雄に對する影響は多大であつたに違いない。楊雄が『太玄』に術數・數術の學を躊躇なく取り入れられたのも、術數・數術の學との距離が近い卜筮者嚴遵の影響を指摘することができそうである。もし楊雄が、卜筮者の嚴遵ではなく師承を尊ぶ易學の專家に學んでいたら、このように術數學の多様な説を『太玄』に取り入れることは着想されなかつたと考えられるからである。

終わりに

以上の部分では、楊雄及び『太玄』に見られる術數學の實態を調査したが、調査の結果、楊雄が天文・曆學・聲律・陰陽・五行・易學の各分野について全て一様に深く精通していたわけではなく、またこれら術數學の『太玄』に對する影響にも差異のあることが理解できた。たとえば『太玄』一書全體の構成を規定するのが『周易』であり、『太玄』首辭がその陰陽消息説を用いているのは言うまでもないことだが、『周易』のほかにも天地人の三統説や五行説も『太玄』の構造を支える根幹をなしており、それらを結び合わせることで八十一首を生み出していた。他方、天文や曆・聲律の學について言えば、楊雄の天文への理解は先進的であつたものの、星占には批判的で、星宿の導入についても『太玄』においてはどれほどの意味があるのか判然としなかつた。天論に關して楊雄は、蓋天説から渾天説に變節するのだが、『太玄』では變節前の蓋天説を用いていた。しかし『太玄』に對する天論の影響は認められなかつた。曆數に關しては、卦氣説を用いて易と曆の一體化をはかつていたものの、太初曆に據りつつ顛項曆にも對應すると言ひ、また九贊の總計七百二十九贊と一年の日數が一致しないという問題が残つた。聲律では『呂氏春秋』『禮記』『漢書』律曆志に據り五聲十二律を取り入れていたが、占筮に際

しての效用は不明瞭であつた。

このように『太玄』全體に用いられた術數學説を見渡すと、易學や陰陽説・五行説は十分に取り入れられていたものの、天文や曆・聲律の學は、理解の深度や『太玄』への影響力という點で一步及ばないと判断できる。ただし天文や曆數はきわめて専門的な分野であり、朝廷が管理するものであつたから、一介の辭賦作家が容易に修得できるものではなかつたとも思われる^⑧。そうであるならば、十分ではないにせよ、楊雄が天文・曆數に通じ、それらを『太玄』に取り込んだことの方が驚くべきことと言えよう。楊雄當時にあつて『太玄』のように複数の術數學説を様々に取り入れた書物が見当たらないことから、『太玄』が特異な存在であつたことが知られる。そして術數學の要素を種々導入して多面性を備え、重層的な數理構造を創り出した點が『太玄』のもつ意義であつたと言えよう。一方、占筮書としては、『太玄』が暦日や晝夜による占法と筮竹による占法の二種を用い、更には陰陽説・五行説・天地人の三統、五聲十二律や二十八宿まで導入したことにより、占斷の際にはこれら多様な原理を利用して奥行きのある判断を下すことができるようになったが、『周易』のもつような占法の一貫性は乏しくなり、占斷は煩瑣なものとなつた。

以上に見た通り、『太玄』は『周易』に基づきつつも、根本原理たる陰陽二爻を天地人の三畫に改めた上、『周易』にはない天文・曆學・聲律・陰陽・五行・易學などの術數學説を取り入れ、「玄」を中心とした數理構造を創出していた。『太玄』という著作が、術數學の諸理論を取り込んだ、壮大な數理構造を創り出すことを目的としたものであるならば、楊雄は『太玄』を執筆した當初、『周易』を模することをどれほど重要視していたのか、疑問を感じざるを得ない。

そもそも『太玄』が『周易』を模して作られたという評價は、小論冒

頭に掲げた『漢書』揚雄傳贊の「以爲へらく經は『易』より大なるは莫し、故に『太玄』を作る。……其の本を斟酌し、相ひ與に放依して馳騁す」という班固の文に據るところが大きい。そこで最後に改めてこの文を含む一段を検討したい。この一段は次のように三つの部分に分けることができる。

①初め、雄年四十餘にして、蜀より來至し京師に遊ぶ。大司馬車騎將軍王音其の文雅を奇とし、召して以て門下の史と爲し、雄を薦めて詔を待たしむ。歲餘にして羽獵賦を奏し、除せられて郎となり、黃門に給事し、王莽・劉歆と竝ぶ。哀帝の初め、又た董賢と官を同じうす。成・哀・平の間に當たり、莽・賢皆な三公と爲り、權は人主を傾け、薦むる所の拔擢せられざるは莫きも、雄は三世官を徙らず。莽の位を篡ふに及び、談説の士の符命を用ひて功德を稱し封爵を獲る者甚だ衆きに、雄復た侯ならず、耆老久次を以て轉じて大夫と爲る。勢利に恬たること乃ち是のごとし。實に古へを好みて道を樂しみ、其の意は文章もて名を後世に成すことを欲求す。

②以爲へらく經は『易』より大なるは莫し、故に『太玄』を作る。傳は『論語』より大なるは莫し、『法言』を作る。史篇は『倉頡』より善きは莫し、『訓纂』を作る。箴は「虞箴」より善きは莫し、「州箴」を作る。賦は「離騷」より深きは莫し、反して之を廣む。辭は相如より麗なるは莫し、四賦を作る。

③皆な其の本を斟酌し、相ひ與に放依して馳騁す。心を内に用ひ、外に求めず、時人皆な之を習^{かろ}んず。唯だ劉歆及び范滂のみ焉れを敬ひて、桓譚は以て絶倫と爲す^④。

まず①では楊雄が王莽・劉歆・董賢と官をともしながら、楊雄のみ

三世も官を移らず、勢利に恬淡として文章によって後世に名を成すことを求めた姿が語られる。②が問題の部分であるから、先に③に目を移すと、そこには楊雄が生涯にわたって書き著した『太玄』『法言』『訓纂』『州箴』『反離騷』『廣騷』『甘泉』『羽獵』『河東』『長楊』の四賦のいずれもが粉本に基づき、廣く涉獵し相い做つたものであると評されている。そして當時の人々は楊雄を軽んじたが、劉歆・范滂・桓譚の三人は高く評價したことが述べられている。

班固がこの一段に描いた楊雄像は、官位を移ることなく文筆に専心したが、その著作はいずれもが粉本に基づいていること、また楊雄には批判が多く、一部の者のみが高評價を與えたというものである。そして問題の②の部分では、楊雄の著作がいずれも粉本に基づくものであることを、「……は『〜』より〇は莫し、『*』を作る（……莫〇於『〜』、作『*』）」という同じ句形を繰り返して説く。『太玄』は『易』に、『法言』は『論語』に、『訓纂』は『倉頡』に、『州箴』は「虞箴」に、『反離騷』『廣騷』は「離騷」に、『甘泉』『羽獵』『河東』『長楊』の四賦は司馬相如に倣って作られた、と同一句形を積み重ねて述べるのである。つまり②の部分は楊雄のいずれの著作も粉本に基づくことを同じ句形で説いた、楊雄の著作に對する大變わかりやすい、言わば類型化した説明なのである。そしてこの説明は、上述した班固の楊雄像の鍵をなす部分となっている。

さて、ここで楊雄が『太玄』を『周易』に倣って作ったという班固の評價について考えよう。「以爲へらく經は『易』より大なるは莫し、故に『太玄』を作る」という評は、右に見た班固の楊雄像に基づいており、類型化された説明の一部であった。楊雄の『太玄』『法言』『訓纂』『州箴』『反離騷』などや四大賦が、それぞれ粉本に基づき做うところがあつたとしても、單に粉本に基づくのみの作とは言えまい。『太玄』が『周易』の

ほかに多数の術数学の要素を利用していたのと同様に、『法言』以下の著作もそれぞれ粉本に基づきつつも、他の要素を取り込み、楊雄なりの表現を追求している^④。つまり、楊雄が『周易』に模して『太玄』を作ったという評価は、『太玄』の一部分のみを見た、類型化した説明に過ぎないのである。『太玄』は、易学史のみではなく、易学のほかに天文・曆学・聲律・陰陽・五行を含む術数学史という、より広い視点から論じられるべきであると思われる^⑤。

注

- ① 楊雄の姓については「揚」と「楊」の二説があるが、段玉裁『經韻樓集』卷五「書漢書楊雄傳後」に従い、「楊」字を用いる。ただし引用資料に關しては底本の用字に據る。
- ② 『訓纂』『揚雄蒼頡訓纂』は『漢書』藝文志・六藝・小學に見える。『方言』の編纂者についてはなお諸説あるが、遠藤光暁「從編集史的角度剖析揚雄『方言』」(『語苑擷英』編輯組『語苑擷英』所收、北京語言文化大學出版社、一九九八年)は、『方言』が複数回にわたり編纂された可能性が高いと言う。楊雄は、この複数の編纂過程における、主たる編纂者と見るのが良いと考える。
- ③ 原文は以下の通り。「大潭思渾天、參摹而四分之、極於八十一。旁則三摹九据、極之七百二十九贊、亦自然之道也。故觀『易』者、見其卦而名之、觀『玄』者、數其畫而定之。『玄』首四重者、非卦也、數也。其用自天元推一晝一夜、陰陽數度、律曆之紀、九九大運、與天終始。故『玄』三方・九州・二十七部・八十二家・二百四十三表・七百二十九贊、分爲三卷、曰一二三、與泰初歷相應、亦有顛項之曆焉。揆之以三策、關之以休咎、緝之以象類、播之以人事、文之以五行、擬之以道德仁義禮知。無主無名、要合五經、苟非其事、文不虛生。」(『漢書』揚雄傳下)
- ④ 章學誠『校讐通義』漢志諸子篇(十四之十一)は、數術略・五行家は數値に基づき技術を述べるものであり、諸子略・陰陽家は理論を述べるものであると言う。

- ⑤ たとえば鈴木由次郎『漢易研究(増補改訂版)』(明德出版社、一九七四年)、朱伯崑『易學哲學史』(一九九五年、華夏出版社)などは『太玄』と術数学との關係を指摘するものの、必ずしも十分には検討されてはいない。
- ⑥ なお、拙論「楊雄《太玄》的寫作目的——從楊雄的生平和學問的角度來考察——」(『第十一屆漢代文學與思想國際學術研討會論文集』、國立政治大學中國文學系、二〇一九年)は、本論文と表裏をなすものであるので參照願いたい。
- ⑦ 術数学の範疇を論じた主な論文として以下のものがある。木村英二「術数学の概念とその地位」(『東洋の文化と社會』一、京都大學文學部支那哲學史研究室、一九五〇年)、川原秀城「中國の科學思想」I 術数学(創文社、一九九六年)、中村璋八「中國思想史上における術数」(『東洋の思想と宗教』十四、早稻田大學東洋哲學會、一九九七年)。
- ⑧ 姚振宗『漢書藝文志條理』卷五(數術略・天文『圖書秘記』)は、漢志・天文の二十二家を五類に分けており、それによれば「星氣」六家、「漢興以來行事占驗」六家、「海中諸占六家のごとく自ら一家の學を爲すもの」六家のように、星占に關連するものを中心である。なお、そのほかには「雲雨虹霓及び三臺星」三家と「圖書秘記」一家に分けている。
- ⑨ 原文は以下の通り。「或問「聖人占天乎。」曰「占天地。」「若此、則史也何異。」曰「史以天占人、聖人以人占天。」或問「星有甘・石、何如。」曰「在德不在星。德隆則晷星、星隆則晷德也。」
- ⑩ 「甘泉賦」には「詔招搖與泰陰兮、伏鉤陳使當兵、屬堪輿以壁壘兮、枹變魘而扶猖狂(招搖と泰陰に詔し、鉤陳に伏して兵を當らしめ、堪輿に屬するに壁壘を以てし、變魘を枹ち猖狂を扶たしむ)」、「校獵賦」には「機槍爲闔、明月爲候、熒惑司命、天弧發射(機槍を闔と爲し、明月を候と爲し、熒惑は命を司り、天弧は射を發す)」とある(『漢書』揚雄傳上)。
- ⑪ 他方、『史記』天官書・『漢書』天文志は「觜觸、參、益州。東井、輿鬼、雍州」と、益州(蜀)を觜觸・參宿に當て、(東)井宿は雍州の分野とする。
- ⑫ たとえば辰首・上九に「倉靈之雌、不同宿而離。失則歲之功乖。(倉靈(歲星・木星)と雌(太白星・金星)と、宿を同じくせずして離る。失へ

- ば則ち歳の功乖く」とある。
- ⑬ 鈴木由次郎『太玄易の研究』（明徳出版社、一九六四年、五四頁）と『漢易研究（増補改訂版）』（前出、四〇六―四一五頁）も王薦説を採用している。
- ⑭ 朱謙之『新輯本桓譚新論』巻七（中華書局、二〇〇九年）。前條について同書は、『太平御覽』巻二引く『桓譚新論』により「北道近、南道遠」とするが、『晉書』天文志上に「北方道遠而南方道近」とあるのと一致しない。能田忠亮『東洋天文学史論叢』（恆星社、一九四三年、三〇四頁）は、『晉書』の方が「意義よく相通する」と言うが、今は兩説を並記するにとどめる。
- ⑮ この章は次のように、渾天説を讚え蓋天説を批判する。「或問「渾天」。曰「落下閔營之、鮮于妄人度之、耿中丞象之。幾乎、幾乎、莫之能違也。」「請問蓋天。」曰「蓋哉、蓋哉、應難未幾也。」（重黎）。
- ⑯ 「難蓋天八事」については、能田忠亮『東洋天文学史論叢』（前出）が詳細に論じているので参照されたい（三〇六―三二二頁）。
- ⑰ 劉韶軍『太玄校注』（華中師範大學出版社、一九九六年）も、引用した整篇の文について「天圓地方、乃古代蓋天説之觀點」と指摘している。
- ⑱ 川原秀城『中國の科學思想』（前出、二〇二―二〇七頁）。
- ⑲ 川原秀城『中國の科學思想』がこの句について「その顛頂曆との關係については、いまだ確證のある解釋を呈示することはできない。だが「亦有顛頂之曆焉」は、太玄曆が顛頂曆と同じく歳末置閏を採用していたことを示す可能性が高いことも事實であろう」と言うのが唯一の見解である（三一六頁）。
- ⑳ 『太平御覽』巻五六五所引『桓譚新論』に「楊子雲大才而不曉音」とある。
- ㉑ 「太玄曆」は宋・許翰が伝え、司馬光『太玄集注』に附録されている。鈴木由次郎『太玄易の研究』（前出、五〇―五二頁）の配當は、宋・王薦『太玄擬卦日星節候圖』（『太玄闡秘』所收）の二十四節氣の配當に基づき、十二辰とともに當てたものと思われる。
- ㉒ 數篇では九天について「九天、一爲中天、二爲美天、三爲從天、四爲更天、五爲辟天、六爲廓天、七爲滅天、八爲沈天、九爲成天」と述べ、圖篇では九天を「始哉、中・美・從」「中哉、更・辟・廓」「終哉、滅・沈・成」と三類に分けて陰陽消息を説く。
- ㉓ 原文は以下の通り。「始哉、「中」「美」「從」。百卉權輿、乃訊感天。雷椎啟竈、輿物旁震。寅贊柔微、拔根于元。東動青龍、光離于淵。擢上萬物、天地輿新。中哉、「更」「辟」「廓」。象天重明、雷風炫煥、輿物時行。陰昏西北、陽尙東南。內雖有應、外觝元貞。龍幹于天、長類無疆。南征不利、遇崩光。終哉、「滅」「沈」「成」。天根還向、成氣收精。閱入庶物、咸首艱鳴。深合黃純、廣含群生。泰柄雲行、時監地營。邪謨高吸、乃馴神靈。旁該終始、天地人功、咸膺貞。」
- ⑳ 葉子奇『太玄本旨』巻九・圖は、引用部分に注して「然年有四時、作三節終是牽強費力」と述べている。
- ㉕ 筆者は「楊雄《太玄》的寫作目的」（前出）の「七、《太玄》與占筮」にて、後世「太玄」を用いて占筮を行なった記録はほとんど伝わっていないが、『太玄』に注釋を施した者の少なくないことを指摘した。これらは「太玄」の「占斷の際に混亂する懸念がある」點と、「多數の原理を盛り込み重層的な構造をもつ」魅力が後世に於いて顯れたものと考えられる。そして同論文では、こうした點から後世の讀者は、『太玄』の占筮としての性質よりも、その文章や内容（重層的で複雑な構造）への關心が高かったと考えた。
- ㉖ 原文は「麗鉤芒與驂蓐收兮、服玄冥及祝融（鉤芒を麗べ、蓐收を驂にし、玄冥及び祝融を服せしむ）」（『漢書』揚雄傳上）。
- ㉗ 「元后誅」については拙論「楊雄「元后誅」の背景と文體」（『學林』四六・四七、中國藝文研究会、二〇〇八年）がある。
- ㉘ 御手洗勝「楊雄と太玄」（『支那學研究』十八、廣島支那學會、一九五七年、二六頁）は、『太玄』のこうした五行の取り込み方を「數を媒介として五行思想を『太玄』に導入した」と指摘している。
- ㉙ なお、朱伯崑『易學哲學史』（前出）は、『太玄』が休王説を説くのは京房易傳の説と一致するとしており、孟喜・京房易と『太玄』の繼承關係を論じている（第二編第三章一節三、孟京卦氣説在易學和哲學中的地位）。
- ㉚ 一例として「三八木」の部分のみ、原文を以下に示しておく。「三八爲木、爲東方、爲春、日甲乙、辰寅卯、聲角、色青、味酸、臭羶、形詘信、

生火、勝土、時生、藏脾、侷志、性仁、情喜、事貌、用恭、搗肅、徵旱、帝太昊、神勾芒、星從其位、類爲鱗、爲雷、爲鼓、爲恢聲、爲新、爲躁、爲戸、爲牖、爲嗣、爲承、爲葉、爲緒、爲赦、爲解、爲多子、爲出、爲子、爲竹、爲草、爲果、爲實、爲魚、爲疏器、爲規、爲田、爲木工、爲矛、爲青怪、爲魼、爲狂。」

③① 『太玄』が相生説と相勝説をとともに取り入れたことについて、島邦男『五行思想と禮記月令の研究』（汲古書院、一九七一年、三二五・六頁）は、告篇の「玄一徳而作五生、一刑而作五剋、五生不相殄、五克不相逆。不相殄乃能相繼也、不相逆乃能相治也。相繼則父子之道也、相治則君臣之寶也」を引き、「五行相生相勝説に於ける相生と相勝を、太玄の一徳一刑の働きのとし、相生を父子の道、相勝を君臣の寶として居り、董仲舒の陰陽刑徳説を襲ぎながら、相勝の解釋を改めてゐる」と言う。

③② 『太玄』が徴に擧げる早・雨・熱・寒・風は、洪範（庶徴）の雨・暘・燠・寒・風とよく通じるが、早と熱は暘ひでりと燠あたたかきより改められている。そして鄭萬耕『太玄校釋』（中華書局、二〇一四年）は、「疑其將此二者誤置」（數篇「三八爲木……徵旱」注）と『太玄』の早と雨の順は錯簡の可能性があると指摘する。

③③ たとえば「三八木」の「類爲鱗、爲雷、爲鼓、爲恢聲……」について司馬光『太玄集注』は、三八の甲が鱗となり、鱗が連なり震えて雷となり、鼓となり、大音（恢聲）をなす（甲象爲鱗、秩秩次比。衆盛蓋極、則震而變爲雷、爲鼓、爲恢聲）と説くが、これは各類のつながりを連想によって類推したものである。

③④ 原文は以下の通り。「御史大夫朱博爲丞相、少府趙玄爲御史大夫、臨延登受策、有大聲如鍾鳴、殿中郎吏陞者皆聞焉。上以問黃門侍郎揚雄・李尋、尋對曰「洪範所謂鼓妖者也。……宜退丞相・御史、以應天變。……」揚雄亦以爲鼓妖、聽失之象也。朱博爲人彊毅多權謀、宜將不宜相、恐有凶惡亟疾之怒。八月、博・玄坐爲姦謀、博自殺、玄減死論。」

③⑤ 『漢書』儒林傳・張山拊に「張山拊字長賓、平陵人也。事小夏侯建、爲博士、論石渠、至少府。授同縣李尋」とあり、『同』李尋傳に「尋獨好洪範災異、又學天文月令陰陽」とある。

③⑥ 鈴木由次郎『太玄易の研究』一部（前出）、同『漢易研究』二部五章（前

出）、堀池信夫『漢魏思想史研究』一章五（明治書院、一九八八年）、鄭萬耕『揚雄及其太玄』三章一（藍燈文化事業股份有限公司、一九九二年）、川原秀城『中國の科學思想』V（前出）、辛賢『漢易術數論研究』四章（汲古書院、二〇〇二年）、劉詔軍『揚雄與漢代經學』二章（廣東人民出版社、二〇一一年）、馮樹勳『揚雄的範式研究』五章（國立臺灣大學出版中心、二〇一五年）、問永寧『太玄與易學史存稿』八二〜九六頁（商務印書館、二〇一七年）など。

③⑦ 八十一首と七百二十九贊の關係については辛賢前掲書に詳しい。

③⑧ 司馬光「說玄」（『太玄集注』所收）に指摘されている。

③⑨ 鈴木由次郎『太玄易の研究』一部一、鄭萬耕『揚雄及其太玄』三章三、解麗霞『揚雄與漢代經學』四章一、問永寧『太玄與易學史存稿』八二〜八八頁（いずれも前出）。

④⑩ 嚴遵については、『漢書』王貢兩龔鮑傳に次のように見える。「君平卜筮於成都市……揚雄少時從遊學、以而仕京師顯名、數爲朝廷在位賢者稱君平徳。」また『華陽國志』先賢士女總讚論にも「嚴遵……常卜筮於市、假著龜以教」と著龜を用いていたことが見える。

④⑪ 王應麟『漢藝文志考證』卷九・著龜『周易』は、漢志・數術略・著龜家の「『周易』三十八卷」を京房・費直・焦贛による『易林』の類と考えている。

④⑫ 後世の記事ではあるが、『晉書』に「星氣・讖緯の學を禁ず」（武帝紀）とあり、天文志・上には渾天儀などは古くからあったとは言え、代々史官が密かに守っていたものであり、學者といえども容易に見ることはできなかった（儀象之設、其來遠矣。縣代相傳、史官禁密、學者不覩）と記されている。誰でもが天文學を自由に學び得なかつたことがうかがえる。

④⑬ 以下に原文を示しておく。「①初、雄年四十餘、自蜀來至游京師。大司馬車騎將軍王音奇其文雅、召以爲門下史、薦雄待詔。歲餘奏羽獵賦、除爲郎、給事黃門、與王莽・劉歆竝。哀帝之初、又與董賢同官。當成・哀・平間、莽・賢皆爲三公、權傾人主、所薦莫不拔擢、而雄三世不徙官。及莽篡位、談說之士用符命稱功德獲封爵者甚衆、雄復不侯、以耆老久次轉爲大夫。恬於勢利乃如是。實好古而樂道、其意欲求文章成名於後世。②以爲經

莫大於『易』、故作『太玄』。傳莫大於『論語』、作『法言』。史篇莫善於『倉頡』、作『訓纂』。箴莫善於『虞箴』、作『州箴』。賦莫深於『離騷』、反而廣之。辭莫麗於相如、作四賦。③皆斟酌其本、相與放依而馳騁云。用心於內、不求於外、於時人皆習之。唯劉歆及范逵敬焉、而桓譚以爲絕倫。」

④ 『法言』の模倣については、「『法言』の表現―經書の援用と模倣」（『學林』三六・三七、中國藝文研究會、二〇〇三年）、「反離騷」の模倣については「楊雄「反離騷」を読む」（『言語センター廣報』十九、小樽商科大学、二〇一一年）にて論じたことがある。

⑤ 『太玄』と『易』の関係について、川原秀城『數と易の中國思想史』（勉誠出版、二〇一八年、三一・三二頁）は次のように述べている。「『太玄』以下の術數書は『易』を模倣したものであるが、宋易のように象數を廢し

て義理をのべてはいない。むしろ徹底して象數に拘泥する。すなわち、易理をささえる易數や易象を介して抽象的な數概念に近づき、數自體の論理の影響をうけ、それを根據として易說の不足を補っている。『太玄』の三進のシステムや『潛虛』の五進法がそれであり、『太玄』が律曆節候（太初曆）に附會するのがそれである。いずれの數の論理も易のシステムに啓發されてはいるが、易外の論理であり、數理の援用にもとづく易學の再構築（數↓易）の性格がきわめて強い。また、術數書『太玄』と、長篇の辭賦を盛んに献上していた宮廷の辭賦作家楊雄との接點について、「楊雄《太玄》的寫作目的」（前出）にて論じたことも附言しておく。

（小樽商科大学教授）